

資料渉猟余話

その70

飯田図書館に保存されている戦前の地方紙

「南信」(明治35年〜昭和14年発行)を読むと、いろいろな発見がある。標題の事績もその一つである。

大正期の同紙を見る。同3月15日付同紙に、「鐵筆界」と題して、折々に篆刻作品が掲載されている。それは、飯田(照)原則として一回に

三十余名で篆刻研究会の書名は篆書体で「鳥路」と印刷され、中に「峡風印社」を組織し、月刊の研究誌を発行する内容の記事である。偶然にも、今回、その

大正期の篆刻研究会「峡風印社」の活動について(前)

鎌倉 貞男

の事物(第三号)が南信州地域資料センターに寄せられた。それは、縦・横17ほどの正方形の和紙三十枚余をそれぞれ二つ折りにして、紙縫で綴じた縦長の冊子である。表紙



「南信」(白城・虚六・光山の作品)大正10年1月1日

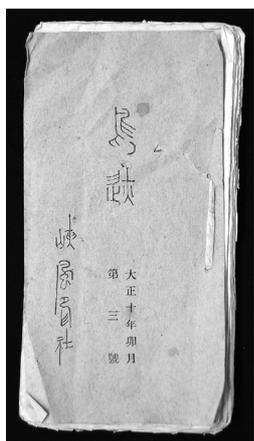
判で、希に文人が用いる遊印のように大型のものもある。印譜の形状は、角印・丸印を始め、小判形や変形のものもあり、さまざまである。

目次には作品の文字と作家名が活字で記されている。作家名はすべて雅号を用いているので実名はわからないが、参考までに次にその名を記してみよう。

前述の三人を除くと、羽生翔岳・佐久間白駒・大竹穆堂・岡田蘭林・森森弥富・倉澤平廻・水野五道・前澤芝峰・山田素人・橋爪南峽・可児素江等である。

賞讃するものは少なく、「何トナク弛緩シテ緊張味ノ乏シキ散漫的ノ作品」と酷評するものが多い。やはり、それだけ妥協を嫌い、高い理想を追究していたと思われる。

最後の通信を読むと、会費が不足したので1円50銭送金して欲しいこと・5月8日の研究会には刀、ノミ、筆墨、自らの雅印、肉池を持参すること・印譜用紙は必ず画箋三十



『鳥路』第三集